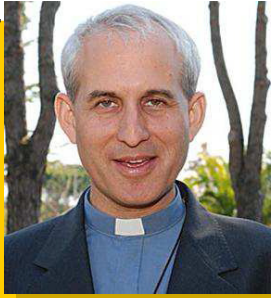


CAGLIERO¹¹

カリエロ11

サレジオ会宣教ニュース N.66 - 2014年6月

サレジオ会宣教部門によるサレジオ会共同体・サレジオ・ミッションの友人のための通信



会員の皆さん、
友人の皆さん……!

6月は、イエスの
いつくしみに満ちた、福音を
告げるみ心に全面的に焦点
を合わせる月です。今月私た

ちは、ヨーロッパでサレジオの使徒的熱意が増すよう
にとイエスに願います! たしかに“旧大陸”の平均年
齢は上がり続けていますが、それは私たちの da mihi
animasの熱意を弱める理由にはなりません!

会員たちと絶えず通信している中で最近、70歳を
超えたあるサレジオ会員から、宣教師に応募するのに
年齢制限はあるのかという質問がありました。福音を
告げるためにも、神の摂理にも、制限を設けることは
できないと私は答えました!

モザンビークのマプトを訪れたとき、私はペドロサ
修道士SDBに出会いました。彼は81歳、ポルトガル出
身、1968年に宣教師として同地に來ました。毎週行っ
ている数々の活動のほか、週末にいくつもの若者のグ
ループのカテキズムを担当できることを彼は喜んでい
ます。

また、第27回総会は次のように強調しています。
「高齢の、また病気のサレジオ会員が祈りと犠牲に
よって人生をささげていることは、若者と共に若者の
ために在る真の使徒職です。彼らは、'da mihi
animas' を生きる共同体の '積極的な' 一員でありつ
づけます。実際に共同体は、この会員たちも使命に参
加するように心を配ります。」ですから、使徒職の '物
置' に入れられていると感じる人が誰一人いませんよ
うに。高齢・病気の会員の皆さん、皆さんのたゆみない
祈りに宣教師たちを、今月は特にヨーロッパのサレジ
オ会員をゆだねます。感謝!

J. Basanes

宣教師顧問
ギジェルモ・バサニェス神父

**主との出会いは、
すべての人に福音を告げるよう
私たちを駆り立てる**

「社 会が大きく変貌するこの時、福音を告げるには、前
進するように駆り立てられる、宣教する教会が求
められます。さまざまな文化や人間的ビジョンにどのように対応し
たらよいか識別できる教会です。変貌する世界は、聖霊の力を通し
てキリストを観想し、キリストと親しく出会うことによって、新たにさ
れ、変容された教会を必要とするからです。キリストの霊は刷新の源
泉です。キリストの霊は、新しい道、新しい創意工夫を見いださせて
くださるのです。……私たちの弱さも、罪も、福音をあかしし、告げ知
らせる道に置かれた多くの障害も、私たちを押しとどめることはでき
ません。主との出会いの体験こそ、私たちを駆り立て、主をすべての
人に告げる喜びを与えてくれるのです。……すべての人に届かなけ
ればならない福音宣教はしかし、最も小さな人々、貧しい人々、生き
ることの重荷や労苦にあえぐ人々から始めるように呼ばれています。
……教会は、真福八端の民です。貧しい人々、苦しむ人々、疎外され
、迫害される人々、義に飢え渴く人々の家です。皆さんは、教会共同
体が優先的愛をもって貧しい人々を受け入れる用意ができてい
るように、皆が中に入り避けどころを見いだせるよう、教会の扉がいつ
も開かれているように、働き努力するように求められています。」

フランシスコ教皇

2014年5月9日 教皇庁立宣教会の会議でのあいさつ





ポストノピスのとき、私は当時の宣教顧問ルカ・バンロイ神父様の手紙を書きました。神父様は宣教地としていくつかの可能性を示してくれました。それから神学生とき、また若い司祭になったときも、バンロイ神父様が続けて祈るようにと助言を書いてくださったのを覚えています。そして主は目上を通して私を呼んでくださると。それから何年もたちました。1996年、アルゼンチンとパラグアイの修練長として5年目を過ごしていたとき、日本に戻るよう呼ばれていると感じました。宣教師として帰るということなのかどうかはわかりませんが、私は帰ることに決めました。それから先の人生を神だけにゆだねて。1964年にアルゼンチンに移住した私の両親と同じ気持ちでした。神の声に耳を澄ませながら。アブラハムのように、私も日本へ帰りました。私にとって2回目の出エジプトでした。1回目は、1964年、両親と4人の兄弟、サレジオ会員であるアンヘルとフィデル、そしてドミンゴとパウリーノとアルゼンチンへ旅立ったとき。残りの4人の弟と、生まれてすぐに亡くなった妹はアルゼンチン

で生まれました。

日本の宣教師として、まず取り組まなくてはならなかった挑戦は、日本語でした。日本にいたのは小学3年生までで(アルゼンチンに移住したとき8歳半でした)、アルゼンチンでは日本人のいない地域に住んでいたからです(メディア・アグアという町)。……移住した当初、自分が日本人であることを意識していなかったため、すぐにスペイン語を覚えてだけでなく、マテ茶を飲み、アサドを食べ、サッカーをし、教会の日曜日のミサの侍者になりました。

家族でアルゼンチンに移住…… そして私は日本に戻って来た……宣教師として!

まく話せないのは、なかなか大変なことでした。再び子どもになったようでした。言葉だけでなく、日本社会の文化や習慣、カトリックが少数派である日本でキリスト者であることを含め(人口1億2600万のうち日本人・外国人合わせて100万人)、新たに学ばなければならないことがたくさんありました。

宣教師として私の最大の喜びは、主が日本で与えてくださった兄弟会員や友人たちです。私にとって皆素晴らしい人たちで、いつも彼らの優しさ、忍耐強さ、連帯、相手を尊敬する気持ち、信仰、秩序や清潔の感覚を新たに発見します。津波の被害を受けた後も、特に福島で、日本の姿を再発見しました。キリスト教の教会や仏教のお寺の壁を超えた連帯の精神です。宗派を超えた連帯の力を私は体験しました。

これまでの人生で、いつも自分の能力を超える役目を与えられ、「はい」と言わなければなりません。人間として未知のものを恐れるのは自然なことですが、愛に満ちた神が共にいてくださることに信頼を置くとき、歩み続けるために大きな平和と力を頂きます。ですから、私より若い(たぶん)皆さんに呼びかけます。宣教師となって、希望に満ちた冒険にのり出すよう呼んでおられる主の声に耳を傾けるため、勇気を出してください。速やかに聞き従う人はいつも神の祝福を受け、神はその人を決して見捨てることはありません!

今、私は58歳、日本で副管区長を務めています。1997年に33年ぶりに日本に帰ったとき、42歳でした。私は浦島太郎になっていました。日本人の顔で日本語をう



マリオ山野内倫昭神父



サレジオ会の宣教の意向

北ヨーロッパ地域の“プロジェクト・ヨーロッパ”のために

高齢化の影響を強く感じているヨーロッパのサレジオ会共同体が、さまざまな国からの若い宣教師と会員のおかげで、聖霊における再生の力を信じ、助けを必要とする若者の期待に応え、人生の意味の探求において若者たちを助けることができますように。ポーランドの各管区がますます開かれ、自国を超えてプロジェクト・ヨーロッパに充実した貢献をすることができますように。



西欧の北ヨーロッパの国々は召命不足と会員の高齢化に悩んでいます。中からの活性化を、他の管区からの若い会員や信徒ボランティアが助けています。カリスマに再び命を与えることは可能であると、会員たちは感じはじめています。プロジェクト・ヨーロッパのさまざまな歩みは、会全体の支援を通して継続されなければなりません。ヨーロッパでサレジオ会の教育のカリスマが必要であることは言うまでもありません。ヨーロッパの社会で方向性を見失った若者たちは、幸せを見つけるため、教育を通しての導きと支えを待っています。国際的な協力の努力は評価されており、熱意が再びよみがえってきているし、将来のためにはなくてはならない最良の取り組みが見られます。聖霊だけがキリスト者の希望と信仰をよみがえらせ、幸せなキリスト者としての生き方のビジョンを若者に与えることができると信じるために、私たちの祈りによる支援はいつも大きな助けになります。